

[研究ノート]

打譜に関する調査報告

梅尾 亮子

1. はじめに

中国の伝統楽器、琴（きん）（七弦琴、古琴ともいう）の演奏は、師からの伝承に基づくものと、自ら琴譜を解説・解釈した（打譜した）ものに大きく分けられる。後者は前者の経験を積んでから行うのが通常とされる。打譜に関する従来の論考は最大公約数的であり、また近年は打譜の結果としての録音、五線譜などと伝統的な減字譜を併記した楽譜資料は徐々に増えているが、これらを検討しても、打譜に対して「どのような認識を持ち、どのような基準で行っているのか」という問いの答えには不十分である。担い手のより幅広い考えに触れるには、多くの代表的な琴家¹⁾が集まることで知られる大規模な古琴打譜会がフィールドとして適していると考え、2001年8月19日～25日に中国の常熟で行われた「全国第四回古琴打譜会および国際琴学研究討論会」（以下常熟打譜会とする）の期間中に参与観察および調査用紙を用いた調査を行った。本報告はその回答を整理し、担い手の様々な生の声を記述することを主眼とする。

2. 打譜をめぐる背景

独奏としての琴楽は、長い歴史の中で儒家、道家、仏教の要素を反映した表題音楽的なレパートリーが形成され、文人を中心に伝承されてきた。現存最古の琴譜は写本で、唐代初期に書写されたとされる文字譜である。その他の現存する伝統的な琴譜は減字譜という琴専用の記譜法で書かれた明清時代の刊本の琴譜集が中心で、約100種ある。なお現存する琴曲は異なるバージョンや異名同曲を除くと600曲余りで、一説では、この半世紀で演奏されているものは約100曲であるという（GONG 1999 : 304）。1950年代に中国ではそれまでの個人的地域的な活動を越えて、公的研究機関による全国的調査で得た琴譜集などの史料研究が進み、リブリントの出版が盛んになった。新中国成立後の社会的、物質的環境の変化が打譜会という組織的な活動につながる要因になったといえる。

3. 先行研究

まず琴譜は奏法譜であり、『中国音楽詞典』に拠ると、「打譜」とは「…譜に基いて曲を弾く過程を指す。琴譜は直接楽音を記録せず、弦位と指法のみを記録しているため、そのリズムはかなりの伸縮の余地がある。このため打譜者は琴曲の一般的規則と演奏技法を熟知し、曲の内容状況を推測して再創造を行い、なるべく原曲の本来の姿を再現する…」（中国芸術研究院音楽研究所 1985 : 62）（日本語訳は報告者）としている。

ベル・ユン(榮鴻曾)は打譜の過程を①文学的調査研究、②技術的調査研究（減字譜の解説）、③音楽と文学的内容を一致させる、の3段階であるとし、①②は基本的に誰でも同じ結果が得られ

るが、③で個性化が起こるという（YUNG：1985）。楽曲の「本来の姿」にはふれず、解題などの言語で規定された「境地」と音楽を一致させるとしている。

成公亮の考えでは、打譜は机上の作業ではなく演奏の結果であり、優れた打譜の成果は必ず優れた弾き手から生まれる。打譜とは音楽考古学であり、音楽芸術であり、琴人が個性を発揮しつつ楽曲の原型に近づけることである。ある一つの最も正確な原型を求める必要はないし、不可能である。原型とは実際は固定的、唯一のものではない（CHENG：1996）とする。

龔一は、打譜の過程を①定譜（版本を選ぶ）、②校勘比較作業、③訳譜（リズム・テンポを決める）、④演奏（最も時間がかかる重要な段階）、⑤ほぼ定まったものを記譜の5段階から成るとする。彼によると、①～③は理性で行い、④は感性を用い、できるだけ楽曲の元の姿を探る過程である。⑤でほぼ完成と言えるが終わりではなく、数年後にある程度の修正が出ることがよくある。「元の姿」を復元する目的で同水準の琴家が同一版本の同一曲を打譜すれば、結果は大体同じか、十中六七は同じになるであろう（GONG：1999）という。

呉文光は打譜の歴史について、ある譜に対して詳細なリズムや演奏を確立するという現代的な意義での打譜は、西洋音楽の影響を受け始めた20世紀初頭の楊宗稷による最古の琴譜「碣石調幽蘭」からであるとし、それ以前は主として創造的打譜が行われていたと考える。このような見地から、打譜を目的によって創造性打譜と再現性打譜に分けることを提案（WU：2001）した。創造性打譜とは主体性に重きを置き、打譜者がその過程で必要に応じて楽曲の楽段、楽句の増減や指法の改変を行ったりする運用を認める態度であるとする。彼は「瀟湘水雲」という楽曲が初出から後代に至り琴譜集の編纂者によって改変されバージョンが変化していく例、また明代の琴譜集名『梅雪窩刪潤譜』（佚書）をあげ、もともとの譜を削ったり足したりして（刪潤）、新しい譜を作る例が歴史的にも見られるとする。一方再現性打譜は、主に学術研究目的に行うある種の打譜で、主体性より目的性に重きを置く。

4. 常熟打譜会の概要

全国規模の打譜会は1964年から不定期に過去3回行われ、前回から16年ぶりとなる今回は、江蘇省東部に位置する常熟市で行われた。内容は主として打譜した琴曲の演奏発表、琴に関する報告および研究発表と討論である。常熟市は明代におこった琴の流派の1つ、虞山派の創始者である嚴徵（1547-1625）がここの出身であることから琴とゆかりが深い。主催者は国立の研究機関の中国芸術院音楽研究所と常熟市人民政府である。なお打譜会は、各地の琴社（琴の愛好および研究団体）と地方政府などの主催で比較的小規模な、地域的なものも時折行われる。

参加者は約170人と過去最高となった。今回の参加者は立場によって3種類に区別され、主催者から参加を要請された「正式代表」が76人（演奏による発表をしたのは46人）、自分で参加申請をした「列席代表」が26人、見学者が約50人である。打譜の結果の演奏や論文発表を行うのは、主催者から選ばれた正式代表だけである。正式代表は事前に、①課題曲4曲（琴譜集は自由

に選んでよい)の中から好きな琴曲を1、2曲、②自由曲(琴譜集は指定された明代の4種から)から1、2曲選んで主催者に報告することを求められていた。報告者は列席代表として参加した。調査の主な対象は打譜演奏を行った人だが、他に、打譜演奏は行わなかったが、その人の録音資料から打譜の経験があると事前にわかっていた人、期間中の交流を通して知り合った人にも協力をお願いした。演奏を行ったのは合計46人で、そのうち44人が打譜演奏だった。調査用紙を配った人数42人中、回収できた人数は38人(打譜演奏を行った人:35人、それ以外の人:3人)で回収率は約90%である。打譜演奏した人の中の回答率は $35 \div 44 = \text{約} 80\%$ である。

5. 調査方法

先行研究を検討した上で事前に設問を準備した。会場などで1人ずつ個別に協力を求め、その場で調査用紙に記入してもらう方法と、用紙を渡してから後日回収する方法を状況に応じて採用し、調査用紙の回答をもとに適宜インフォーマルなインタビューを組み合わせた。報告者は調査の時点で琴の学習歴が7年目で、それまで個人的な交流やシンポジウムなどの活動を通して中国の琴人たちとの良好な人間関係が持続しており、調査用紙に回答していただいた38人のうち10人とは以前から面識があった。調査用紙の設問全体は文末の付録をご覧ください。

6. 調査の結果

回答者の年齢構成は20代から80代までと年齢の幅が広く、50代と60代が中心である。以下にⅠ選曲の理由つまり打譜の動機、Ⅱ打譜の際最終的に重視すること、Ⅲ打譜に対する考え、の順で見ていく。今回は辞書的な説明ではすくいとれない担い手の考えの記述に意義を見出しているため、パーセンテージの提示は最小限に止める。なお自由回答は回答内容を検討の上、大きく類型化して多い順に回答例を挙げる。

Ⅰ 【 選曲の理由: 質問2, 4 】 (自由回答式)

打譜の動機として①が最も多いことは琴楽と中国の人文的題材の密接な結びつきを再確認することとなった。

① 人文的題材 (楽曲の文学、思想、歴史的人物と関連に対する興味)

- ・ 屈原の「離騷」は中国古代の優秀な文化を代表している。
(今回は打譜演奏者の四分の一が「離騷」を選んだ)
- ・ 屈原を尊敬している。 ・ 王羲之を尊敬している。
- ・ 作者が古代の賢人の諸葛孔明であると楽譜の解説に紹介されている。
- ・ 曲名に詩意があり、小標題(楽句ごとの題)が興味深い。
- ・ 楽曲の内容が神話伝説と関係ありそうだから。
- ・ 道家の清静無為の音楽への現れを探る試みである。
- ・ 古人がどうやって「礼」の束縛を脱して愛情の題材を表現しているか理解したい。

② その他

- ・時間の関係で短い曲を選んだ。 ・大曲だから。
- ・先人の打譜に不足があるかどうか知りたい など

③ 純粋な音楽的興味

- ・興味深い定弦法を用いている。
- ・珍しい調性転換がある。
- ・旋律が似ている別の琴曲と比較研究する。
- ・虞山派演奏スタイルの原型を研究する試み。
- ・芸術性が高く、中国琴楽後期の様子を反映している など

④ 「古い」 点に注目

- ・古来より名曲だから。 ・最も古い琴歌だから。
- ・現存する最も古い琴譜集の第一曲なのでどんな意義があるか調べたい。
- ・古曲の原型とその発展を調べる（現在流行しているのは同曲の明末～清代の譜によるバージョンなので）。 など

Ⅱ 【 打譜の際、最終的に重視すること：質問 6 】（多肢択一式）

結果は b 「なるべく楽曲の本来の姿に近づける」が最も多く、次に多いのが「その他」の自由回答である。以下の回答例からは打譜という行為の一言では括れない性質がうかがえる。

- ・原型に近づけるのは第一歩に過ぎない。さらに重要なのは古譜を現代の旋律と指法を用いて再創造し、それをもっと現代という時代色豊かな楽曲の感性にすること「古為今用」（古を今のために用いる）である。
- ・楽曲の文化（儒教、仏教、道教）的内容と音楽を結びつける。
- ・打譜のための打譜ではない。まず作者の時代背景、作曲の目的と作者の個性を理解する。
- ・なるべく古譜を復元し、芸術上から「復響」する。
- ・精神的に古人と出会うことが、なるべく楽曲の本来の姿に近づけること。譜と自分を共に忘れ、完全に一種の「境地」に入る。

Ⅲ 【 打譜に対する考え：質問 7 】（多肢択一式）

結果は c 「学術的復元活動であると同時に一定範囲の創造性を伴う音楽芸術活動」が最も多い 64%で、次が a 「学術的復元活動」の 21%である。一方前述のⅡの回答で最も多いのは「なるべく楽曲の本来の姿に近づける」（47%）である。もし「なるべく楽曲の本来の姿に近づける」が楽譜に忠実な姿勢という共通理解があるのなら、Ⅲの回答は「学術的復元活動」が最多となるはずである。しかし結果からは「本来の姿に近づける」ことを単に「学術的復元」だけではなく、「同時に一定範囲の創造性を伴う」と考える担い手の傾向が浮き上がってくるのである。

7. まとめ

常熟打譜会の討論では、「いかに打譜するか」に関連して活発な発言があり、中でも「原譜」の改変をめぐる問題と、打譜の目的によって基準を分けるという提案が大きなテーマとなっていたようである。前者は、原譜に誤刻などの間違いがあると判断して改変を加える場合は、理由を明記して加注することが再確認されていた。後者は、打譜の結果をどのように記譜するべきかという内容に発展し、五線譜を併記して用いる場合の小節線の扱いなどをめぐって意見が交わされた。記譜の問題はこれからも継続して議論される見通しである。

また、「打譜の結果はその他の分野、例えば研究者による音楽分析や民族的要素を持つ作品への応用などに関わるため、規範性が求められる」という発言もあった。これは目的に合った打譜の方法を採用すれば解決できると考えられる。本報告は先行研究を補足するに留まり、深い解釈分析には至っていない。ただその後の研究の動向を見ると、安易な規範化にむかう誤解を生みやすいことが懸念される。このような時期に、琴の担い手の多様な認識の記述は意味を持つのではないだろうか。最後にこの場を借りて、調査に協力してくださった方々に深くお礼を申し上げたい。

*付録：調査用紙（日本語訳）

「打譜に関する質問」

お茶の水女子大学博士前期課程 梅尾亮子

1. 課題曲にどの琴譜集のどの曲を選びましたか？琴譜集の名前を記入し、曲名に○をつけてください。
琴譜集： 神奇秘譜 西麓堂琴統 風宣玄品 大還閣琴譜
曲名： 関雉 修禊吟 山中思友人 離騷 その他（ ）
2. なぜこの曲を選びましたか？その理由をお書き下さい。（ ）
3. 自由曲にどの琴譜集のどの曲を選びましたか？琴譜集に○をつけ、曲名をご記入ください。琴譜集： 神奇秘譜 西麓堂琴統 風宣玄品 大還閣琴譜
曲名：（ ）
4. なぜこの曲を選びましたか？その理由をお書き下さい。（ ）
5. 打譜する曲に録音などがある場合、参考にしますか？どちらかに○をつけ、その理由をお書きください。 ①参考にする ②参考にしない
理由：（ ）
6. 打譜を行う時、最終的に重視することは何ですか？a～dの内、最もご自分の考えに近いものを一つだけ選んで○をしてください。 dを選んだ方はご自分の考えをお書き下さい。
a 楽曲の文学的内容と音楽を結びつける b なるべく楽曲の本来の姿に近づける c 自分のスタイルを発揮する d その他（ ）
7. あなたの「打譜」に対する考え方は、a～dの内のどれに最も近いですか？
一つだけ選んで○をつけてください。 dを選んだ方はご自分の考えをお書きください。

- a 学術的復元活動 b 一定範囲の創造性を伴う音楽芸術活動
c 学術的復元活動であると同時に一定範囲の創造性を伴う音楽芸術活動
d その他（ ）

8. ご年齢に当てはまるものに○をつけてください。

10~20歳代 30歳代 40歳代 50歳代 60歳代 70歳代 80~90歳代

9. もし宜しければお名前をお書きください。 *ご協力ありがとうございました*

注

1) 中国語では琴を弾く人を、一般的に職業に関係なく「琴人」といい、大家は「琴家」と呼ばれる。

参考文献（主要なもののみ）

CHENG, Gong liang 成公亮

1992 「琴曲『文王操』打譜後記」，《中国音楽学》3：36-45.

1996 「打譜是甚麼？」.『音樂研究』第一期

GONG, Yi 龔 一

1999 『古琴演奏法』 上海：上海教育出版社。

WU, Jing lue 吳 景略; WU, Wen guang 吳 文光

2001a 『虞山吳氏琴譜』 北京：東方出版社。

WU, Wen guang 吳 文光

2001b 『打譜探蹟』 常熟打譜会配布資料

YUNG, Bell (中国名: 荣鸿曾)

1985 "Da Pu : The Recreative Process for the Music of the Seven-String

Zither." Anne Shapiro(ed.) *in Music and Context: Essays in Honor of Jhon*

Ward, Cambridge : Harvard University Music Department.

ZHANG, Hua ying 章華英

2006 『古琴音樂打譜之理論與實証研究』 中國藝術研究院 博士論文

Zhongguo Yishu — 中国芸術研究院音楽研究所『中国音楽詞典』編輯部(編)

1985 『中国音楽词典』 北京：人民音楽出版社。

Zhongguo Yishu, Beijing Guqin — 中国藝術研究院音樂研究所；

北京古琴研究会 (編)

1962 『古琴曲集』第一集 北京：人民音樂出版社

1983 『古琴曲集』第二集 北京：人民音樂出版社

とがお りょうこ

お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士前期課程修了。現在、同大学院博士後期課程に在学中。